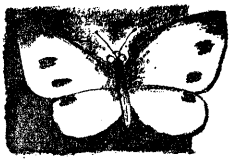

保育者の児童観

――覚え書として――（1）

高橋さやか

1　現場の保育者の立場から

「まず、児童観をはっきりさせなくては」

親しい同僚が集ったとき、何を論じてみても結局この一句に論点が集中し、集中して結論をうち出さなければならないところで、何となく焦点がきっかりと結ばないまま、論者それぞれ満ちたりない思いで「ではまた」と別れる。……そんなことをくりかえしてきたのもいつか何年、という数え方をしなければならないような時の重なりを経過してしまっている。諸兄姉、先生がたの中には、何をいまさら、といわれるかたもあるかとは思うけれども、私としては、この問題をどうしても確かめたいので、いただいた紙数を多少の逡巡や面はゆさを覚えながらも、私なりな問題提起と方向づけにあてさせていただくことを許されたいと願う。

現場の保育者として、何が困るといって、干渉過多の母親（に限らず、祖父母、父兄姉、その他同居家族たる年長者たち）ほど困るものはない。問題児の過半はむしろ問題家庭というべきであり、問題の親というべきである。両親もよい、余計な影響者もいない、地域社会の状況も無難だ、ただ、その子ども本人だけが困る、というのはまあ稀だといってもよいと思われる。

もう一つ困るのは、正直に言って、同じ現場で働く保育者どうしの考え方、態度の対立である。ことに、子どもの活動とその結果にかかわる価値観・評価のいかんが、そのまま保育方針につながり、そこにわりきれない本質的な対立（おとなどうしの感情問題とか好悪とかではない、仕事の上での誠実をかけた対立）を生むことである。

この、二つの「現実の保育生活における困惑」から、一つの事実がひき出される。

保育者が、保育生活で困惑し、困難を覚えるのは、人間関係に一方的な押しつけ（圧迫）がでてくる場合だ、ということである。

特に、おとな対子どもの間に、それが起り易いし、次いでは、子

どもを中にしておとな対おとなの間にも、やはり一方的な事情が生じ、それが正常な保育生活を破壊してゆくことが多いとみられる。

対人関係が一方的な押しつけを伴うのは、すなわち、一方が他方を対等に見、扱うことをしない、という事実を意味する。

実際問題として、この事実は重大である。

言うまでもなく、私たちは、被保育者と保育者の間のギャップの前に立たされている。

保育教育とは、そのギャップを埋める仕事だ、というような言い方もできるかもしれない。

ギャップというのは、発達（ある程度にもしろ）しているものと未発達のもの、社会化を完了（これもある程度、といわねばなるまいが、――以下この含みを略する）しているものとこれから社会化するもの、知識技能を修得しているものとこれから修得するもの、の差――へだたりである。

このギャップに対処する態度―そこに児童観があり、またその確立を切実に求めなければならない心情があるのだが、実際に古い昔から、おとなたちは、それぞれの認識においてこのギャップを埋めようと努力してきたし、適不適は知らず、とにもかくにもさまざまなやり方で埋めてきたことは事実である。

私たちは、要するに、最も適当なギャップの埋め方を知りたいのである。

そして、私は、身をもって経験し味わった保育生活の中から、「対等な対人関係において」それがなされなければならないことを強く考えないではいられない。

さまざまな文献が、いくつかの児童観を私たちに示してくれる。

本能的な愛情の対象であり、原始的な神秘感と結びついた畏怖の対象であったことは、神話伝説、歴史物語その他の文学や、庶民の間に伝えられた民話の中に発見できる。すなわち最も素朴な児童観に、「愛すべきもの」「おそるべきもの」がある。そして「保護すべきもの」という認識も早い（古い）ものである。

次には「弱小なる従属者」という見方が久しくつづいているとみられる。これは中・近世を通じて普遍的な見方であった、といいたいが、近・現代にもなお一般的に肯定されている見方だといわなければならない。

一方、ラブレーやコメニウスを先駆とし、ルソーにおいて劃期的な一線が明らかにひかれることになる近代的児童観の特長は、いうまでもなく、おとな中心の児童観から脱皮して、児童期の独自性を発見したことにある。そして重要だと考えられるのは、児童期の発見が、人間性の回復と並行してなされた、ということである。

ここで、ルソー以来の、ペスタロッチ、オーエン、フレーベル、スペンサー、デュウイらの児童観をいちいちとりあげてのべることは控えたい（周知であるし、あらためて論じることはこの稿の任ではないと思うので）が、現在、保育者としての私たちの、少なくと

も理念のせかいでは、子どもを、ことさらに、基本的人権の確乎とした所有者として、一個の独立的な人格者としてみとめる、というようなことはいまさら論ずるまでもないし、子どもを、人間としておとな以上にも以下にもみないことが当然である、という見方も、奇異とするには当らないことは、そのようにみて差支えないことだと思う。

つまり、今日の私たちにとって問題になるのは、児童とは何者であるか、というよりも（児童も一個の尊重されるべき人間――人格者であることはすでにまぎれもないことなのだから）、発達――発育とは、いかなる事実であるか、ということなのだと考えられる。

子どもとは、発達する人間―発育期の人間なのである。

おとなと子ども、保育者と被保育者の間にあるギャップは、まさしく、この「発育」のいかんにかかっている。

ここで、はじめにかえるのだけれども、（社会化といい、知識技能の修得といい、それらはみな発達という事実の中に含めて考えられるし、逆にまた、発達という事実の具体的な内容はといえば、社会化なり、知識技能の修得なり――この両者も分ち難く相関している――を意味するともいえるのだ）、明らかにしたいことの一つは、発達過程を経ているのと、経ていないのとの事情において、人間関係が対等でなくなるのは、非常に困惑すべきことがらである、という考え方である。

私たちの周囲には、どうしても、より発達している人間の方が、より発達していない人間よりも優越した価値をもち、前者が後者に当然に一方的な圧迫を加えてもよい、しかもそうすることが、後者の発達を促すのだ、という考え方が、ふっきれていないようにうけとれる。

しかし、発達という事実はそれほど単純でも、つかみ易い――判定し易いものでもないといわなければならない。

真実、どのような発達が、人間として必要な発達であり価値のある発達なのであろうか。おとなが現在経過し獲得した発達の過程と結果とは、人間自身にとってすべて有意義なものであっただろうか。しかもまた、発達を促すに当って、本当に適当な処置は、いかに確認されるのであろうか。

このような問題の間に、対人関係の上下高低、一方的圧迫などが介入することは、何とも始末の悪い、合理性を薄弱にさせる過ちのもとだといい得るであろう。

もし私たちが、あいまいなままに「より発達した」人間か、「未だ発達していない」人間に一方的な圧迫を与えることを肯定するなら、私たちは近代以前に逆もどりすることになるし、自分たちの非合理性を暴露することになると思う。

こういうことをくどく言うのは、私自身にとって、教育力――保育者としての自分がもっているはずの――にかかわる大きな疑問があるからである。

保育者は、被保育者たる子どもにとって、どこまでも一つの条件

――成長発達のための――であるにすぎない。ほとんど相拮抗するに足る条件は、保育者の他に一つならず子どもの周囲をとりまいているのである。

どのような発達も、それにふさわしい条件なしには成立しない、ということは自明の理であるけれども、保育者自身がそこに充当するものとなるべき条件は、果してどの程度の重みをもち、保育者自身以外の条件とどのように相関しオルガナイズされるものなのであろう？

対等の人間、という考え方に立つとき、児童観は人間観と別個には存在しない。

しかし、子どもに対するに限らず、あらゆる人間に対して、正しい人間関係を結ぶためには、その人が、どのような条件下におかれているかを理解しなければならない。

ことに、成長発達―発育にあずかろうとする場合に、子どもという時期と、その子という個体のもっている条件の認識は絶対に必要である。

児童観、というのは、そういう条件の解明と認識とをいうのであろうか。

が、それならば、莫然とした児童観は、もはや、ないのではないだろうか。

胎児、初生児、一才未満児、三才未満児、六才未満児、幼年期、少年期、思春前期、思春後期……厳密に截然とは別け得ないにしても、一応の段階づけと、各々の段階的特徴をとらえようとするほかに、その全般に通じる何かの観念をもとうとするならば、やはり莫然と、「発達する（力の特別につよい時期にある）人間」という以外、いえなくなってしまうのではないだろうか。

子どもを愛し尊重することは、人間を愛し尊重することと別のことではない。そして対等な人間として、独立した生活力をもつ相手として、あるいは協力し、あるいは要求し、あるいは対立しながら、相互によりよい生活者としての条件を獲得するために（おとなとても緩慢ながらなお発達をつづけるものだといえる）力をつくすべきなのではないだろうか。ただ、独立した生活力といっても、乳児には乳児としての段階があり、その段階のもっている条件がある。加えて、各段階にそれぞれ関与している環境の条件がある。おとなと子どもとでは独立なら独立ということのあり方が違うのもいうまでもない。そこにこそ発達の必要と必然があるのにほかならない。

強いていうなら、保育者としての誠実な児童観は条件（個体が内在させているものと、外的環境からうけるものと両方の）の集積である子どもを、その条件に対応しながらとらえることと、生活者として新しい条件を獲得し、発達を遂行するものとしての子どもを認めることとのうちに把握できるのではないかといえるであろうか。

以下、発育――成長し発達する――という事実をめぐって、実際保育における事例に拠りながら、しばらく考えてみたい。

（西南学院短期大学）